

世界に羽ばたけ！ 米山学友^⑬

アフガニスタンの「K I B O U」



「希望の学校」で、洋裁や読み書き(写真右)を習う生徒たち



アフガニスタンの首都カブールの「希望の学校」で洋裁と読み書きを教える教師の一人、ファティマさんは毎朝、家を出るときに「さようなら」と言います。いつでも命を落とすかわからないからです。子どもの誘拐や、登校中の女子学生への被害も増えています。5歳未満児の死亡率は世界で2番目に高く、子どもの4人に1人が重労働に従事する、それがアフガニスタンの現状です。

同胞の苦難につる自責の念

「希望の学校」創立者の米山学友・駿^{スルタニ}溪トロペカイさんは、1951年カブール生まれ。将来は父親と同じ医師の道を歩むつもりでした。しかし進学の際、その父から「汚水を飲むなど注意しても、人々は飲んで病気になる。知識がないから防げる病気も防げない。今、必要なのは教育だよ」と反対され、しぶしぶ進路を変更。大学卒業後は、高校や短期大学で英語教育に携わりました。

来日したのは77年。夫が国費留学生として日本に来ており、「ちょっと見てみよう」という、ごく軽い気持ちでした。ところが79年に旧ソ連軍のアフガニスタン侵攻が始まると、国内の治安が悪化。両親からの手紙には「しばらく帰国しない方がいい」と書かれていました。

その後、筑波大学大学院修士課程へ進学し、米山記念奨学生に合格。当時は茨城県と栃木県が1つの地区で、つくば市に住む駿溪さんの世話クラブは小山ロータリー

クラブ(RC)。例会場まで片道3時間以上の道のりは負担が大きすぎる、というカウンセラーの申し出により、途中で土浦RCへ。アフガニスタンをよく知る会員との出会いもあり、ロータリーには温かい思い出があります。ただ、この時期の駿溪さんは、とても苦しい悩みを抱えていたの

です。「母国の家族や友人がどれほど辛い目に遭っているかと考えると、ただ申し訳なく、悲しい日々でした」

アフガニスタン侵攻による死者150万人以上、その後も民族間の内戦が続き、彼女の兄妹は世界各地に離散。終わりのない戦争に、誰もが希望を失ってしまいました。

教育を糧に、絶望から希望へ

アフガニスタンでは女性差別が根強く、特に、96年からのタリバン政権下では教育と就業が禁止され、女性の識字率は当時、数%にまで低下しました。

「教育は知識だけではなく、人に“良識”を授けます。このままでは女性は自分で何かを判断することすらできない」。そう考えた駿溪さんは、アフガン女性に生きる力を与えるために、識字教育と職業訓練の学校を建設したいと考えはじめました。この間、日本で生まれ育った娘たちのために一家で日本に帰化しましたが、母国への思いは変わりませんでした。

2001年にタリバン政権が崩壊し、23年間に及ぶ内戦が終わると、翌年4月、つくば市でボランティアグループ「希望の学校」を発足。8月、現地の情報収集のため、25年ぶりに故郷の土を踏みました。

見渡す限りのがれきの山、辛うじて残った弾痕だらけの壁、路上にあふれる、親を失った子どもと夫を亡くした女性、変わり果てた故郷の姿に泣き崩れました。そし

女性の識字率 18%、世界でも最低レベルと言われるアフガニスタンで、女性の識字教育と職業訓練を行う「希望の学校」を設立した米山学友・^{スルタニ}駿溪トロペカイさん。この学校には、23年間に及ぶ内戦で「絶望」ばかりを与えられた子どもや女性たちに、「希望」をもってほしい、という祈りが込められています。家屋や農地、社会インフラなど、すべてを失った母国の再建には、教育と、女性の力が不可欠だからです。



て、就学の機会を奪われたまま成人した女性には教育支援の手が届かない現状を知り、この世代の意識改革と経済的自立が急務だ、との思いを強くしました。

03年10月、「希望の学校」カブール校を開校。入り口の看板には現地語に加え、日本語やアルファベットで「希望」、「KIBOU」の文字を掲げました。集まった生徒は4人。アフガニスタンでは男性の許可なしに、女性は教育を受けられません。駿溪さんは民家を一軒一軒訪問し、教育の大切さを説いて回りました。そして4日後には20人、1年後には50人となり、これまで700人以上に読み書きや洋裁、算数などを教えました。うち、200人が洋裁で生計を立てられるようになりました。ここから中学や高校に進学した生徒もいます。

人をつくり、国をつくる

入学当初、無表情だった生徒たちは「希望の学校」で学ぶうちに、笑顔を見せるようになりました。目の前で家族を殺されたショックでまひした少女の腕が、少しずつ動くようになりました。家族に気づかれぬよう、買い物や水くみに行くふりをして通う生徒もいます。

運営の苦労は絶えません。経済と治安の悪化、教員の質などの問題のほか、年々高騰する家賃に頭を悩まされ、開校から何度も移転を余儀なくされています。寄付に頼らず自立運営したいと昨年、小さな縫製所を併設し、わずかながらも収入は得られるようになりましたが、十分

プロフィール

^{スルタニ}駿溪トロペカイ さん

(1981-83/小山RC、土浦RC)
カブール生まれ。1977年来日。筑波大学大学院修士課程修了。2000年日本に帰化。02年つくば市に「希望の学校」設立。03年カブールに「希望の学校」設立。現在、筑波大学教育開発国際協力研究センター学外研究員。お茶の水女子大学グローバル協力センター客員准教授。



ではありません。特に治安の悪化は、駿溪さんの胸に暗い影を落としています。しかし、生徒たちから喜びの声を聞くたび、自らを奮い立たせています。

「もっと多くの女性に教育と技術を身につけてもらうために、カブール以外にも学校をつくりたいと願っています。いつかは女子大学をつくりたい。武器や戦争のない世界をつくるために、まず人をつくり、その人々によって国をつくるための教育に、力を尽くしたいのです」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

台北東海RCが創立15周年迎える



台北東海RCが創立15周年記念式典を開催

米山学友を中心に誕生した最初のクラブ、台北東海ロータリークラブ(RC)の創立15周年記念式典が4月10日、台北市内のホテルで盛大に開催されました。台湾で日本語を公用語とする珍しいクラブであり、日本からも10クラブ130人が出席。創立会長の徐重仁氏(1976-77/平塚RC)は15年間を振り返り、「歴代会長のリーダーシップの下、クラブ運営、国際交流、社会貢献に多くの成果を残し、日台文化交流の懸け橋として積極的に活動してきました。順調な発展を続けられたのも、日台ロータリーの諸先輩方のおかげです。今後も社会とロータリーのために尽力してまいります」と語っています。